

# 中山間地域の中学生の現状と思春期健康支援における課題

## —中学校教員への半構成面接から—

長友 舞<sup>1)</sup>・長鶴美佐子<sup>1)</sup>・坂元夏美<sup>2)</sup>・大野理恵<sup>1)</sup>

key words : 中学校教員, 中山間地域, 思春期健康支援

### I. はじめに

中山間地域の中学生のほとんどが高校進学のために、保護者のもとを離れて生活をしなければならない。思春期の多感な時期に離村し新たな生活環境に移行する中学生には「自己の心身を大切に、セルフケアできる」力がより必要とされるため、中山間地域の学校教育では性教育をはじめとする離村前の思春期健康支援の充実が求められる。

我々はこれまで中山間地域の学校現場から要請を受け、卒業前の中学生を対象とした思春期健康支援講座を実践してきた。これまで中山間地域の中学生の特性を踏まえた支援のあり方を模索しているが、その方向性を見出すには至っていない。先行研究では、中山間地域の中学生への健康支援教育実践報告や中学校教員の性教育実践への困難感や戸惑いの実態報告<sup>1) 2)</sup>がされている。しかし、思春期健康支援を検討する上で必要な中山間地域の中学生の特性や現状、課題については十分に明らかにされていない。

思春期健康支援の方向性を検討するにあたり、学校教育の中で支援に大きく関わっている中学校教員が現状や課題をどのように認識しているのか把握することが必要であると考えた。これらが明らかとなることで、中山間地域の子供達への思春期健康支援に取り組む際の示唆を得、思春期健康支援のさらなる充実につながることをねらいとし本研究に取り組むこととした。

### II. 目的

中山間地域の中学生の現状と中学校教員が捉える思春期健康支援の課題を明らかにする。

### III. 方法

研究デザインは半構成的面接法による質的帰納的研究である。中山間地域の中学校3校に研究協力依頼を行い、

学校長より研究協力の許可を得た後、研究調査趣旨等を明記した文書の配布及びポスター掲示を行い、研究参加者を募集した。研究参加の意思表示をした中学校教員の同意を得た後、研究協力依頼書・同意書を送付した。研究参加者は中山間地域3校の中学校教員8名(男性5名、女性3名)、養護教諭1名であり、データ収集期間は平成30年3月から8月である。分析では、まず許可を得てI.C.レコーダーに録音したデータを逐語録にした後、中山間地域の中学生や思春期健康支援の現状や課題が語られている文脈をデータとして抽出しカテゴリー化を行った。カテゴリー化の過程では共同研究者と質的研究経験者の助言を得ながら行い、研究の信頼性と妥当性の確保に努めた。

本研究では、思春期健康支援を「思春期の子どもたちの健全な成長発達を促すための、思春期の特徴や心身の変化を踏まえた様々な健康支援で、具体的には、思春期教育・性教育・生活指導を含む健康教育などの支援(集団指導だけでなく個別指導も含む)」、中山間地域を「都市や平地以外の中間農業地域と山間農業地域の総称であり、本研究で扱う3村は、A県の地域振興条例第2条に該当する村」と定義し用いた。なお、本研究で扱った3村は人口3000人未満の村である。

### IV. 倫理的配慮

本研究の趣旨と研究への参加協力及び撤回の自由の保障、対象者の匿名性およびプライバシーの保護、中断も可能であり、これにより不利益を被ることがないこと、研究成果の公表等を文書及び口頭で説明し、同意を得た。本研究は宮崎県立看護大学研究倫理委員会の承認を得た(承認番号第14号)。

ながとも まい 1) 宮崎県立看護大学 2) 宮崎県立宮崎病院

## V. 結 果

### 1. 研究参加者の背景

年齢 20 歳代～50 歳代 (平均年齢 40.3 歳) であった。教員経験年数 1～10 年 3 名, 11～20 年 3 名, 21 年以上 3 名であり (平均年数 18.3 年), 中山間地域での教員経験年数 1～5 年 5 名, 6 年以上 4 名 (平均年数 3.8 年) であった。

### 2. 中学校教員が感じる中山間地域の中学生の現状

中山間地域の中学生の現状として 27 データから, 8 サブカテゴリー, 3 カテゴリーが生成された。

以下, カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは< >で示し, 中学校教員の語りを「 」に表した。( ) は研究参加者の語りの意味を理解しやすいように, 研究者が文言を補足したものである。

#### 【異性に対する性意識の低さ】

中学校教員は, 「小さな頃から育っているので, 仲がいいのはすごくいいが, 男女というものがない」という幼少時から男女関係なく一緒にいるため, お互いを異性として意識することがないまま成長していくという<未熟な性意識となりやすい成育環境>が背景にあり, また, 「家の出入りが自由なので, 親もそれが当然で, 男女で家の中にもある」という<保護者の性に対する意識が与える影響>が中山間地域の中学生の【異性に対する性意識の低さ】につながっている現状があると捉えていた。

#### 【コミュニケーション力の未熟さ】

中学校教員は, 「人間関係づくりがうまく出来ないとか, 自分の気持ちをうまく伝えられない」という中学生の状況から<自分の思いを他者にうまく伝えられない>と感じていた。それは, 「大きな学校に行ったりして一から (人間関係を) 作らなくてはいけない, そうなった時の戸惑いだったり, その時にどういう言葉を使って, (相手とどのように会話をするのか) トレーニングがなされていないことはやっぱりある。」という<未熟なコミュニケーションスキル>につながっていると捉えていた。

#### 【人間関係構築力の未熟さ】

また, 中学校教員は, 「(中山間地域の生徒は) 人に見られるとか, 他者の目を普通, 気にするがその感覚があまりない」と感じており, <他者からの視線が気にならない>という生徒たちの感覚を危惧していた。さらに, 「保護者もお友達みたいな感覚で, 大人が身近すぎて, 付き合う上での人間関係の作り方, だいたい分かってくれているという部分がある」という<大人との関係性が強い成育環境>や「普通, 平地だったりしたら, 大人数の中でもまわたりして, この子は苦手でもこの子とは気が合いそうだから, この子と友達になりたい, 友達になれる。でも, 十数人だったら, 自分に合う子がいなくても, 選択肢がない」といったことから<集団生活の適応する能力が未熟>だと感じ

ており, それらが【人間関係構築力の未熟さ】につながっているのではないかと不安を感じていた。

### 3. 中山間地域の中学校教員が感じている思春期健康支援に対する思い

中学校教員が感じる思いとして 22 データから, 7 サブカテゴリー, 3 カテゴリーが生成された。

#### 【自己の実践力に対する不安】

中学校教員による思春期健康支援については, 「親御さんに性に関することを直接アプローチすることはなかなか敷居が高い」といった<性的話題を持つことに対する戸惑い>を持ちながらも, 「性に関する部分は, なかなかどう切り込むかというのが難しい」とく迷いながら実施する現状>があった。さらに, 「赴任している養護教諭は 1 人しかいない」といった<指導を行う教員の不足感>もあり, 【自己の実践力に対する不安】を抱え, 子ども達に対する性教育への戸惑いや困難感を感じているという現状が分かった。

#### 【人的ネットワークの乏しさ】

また中学校教員は, 「中山間地域ではなかなか (専門家との) つながりが持てない」と専門家とつながることの難しさを感じながらも, 「一緒に考える人がいないので, 今までの学校の指導案をもらって, 知り合いの指導案とか, 実態を自分が見たり, 先生たちが見たり聞いたりして実感したことを入れて指導案を作っている」など<ネットワークがない中での指導の工夫>を行っている実態が分かり, 【人的ネットワークの乏しさ】という課題が明らかとなった。

#### 【地理的条件から専門家への依頼を躊躇】

【人的ネットワークの乏しさ】に加えて, 中学校教員は, 「特に中山間地域の部分では, 一日がかりでだれかいなか講師を探す」といった<専門家の選定の困難さ>を抱えながらも, 「遠くから来ていただくとなると, 躊躇してしまうし, 申し訳ない」と<地理的特性からくる消極的な姿勢>が見られ, 【地理的条件から専門家への依頼を躊躇】してしまうといった現状が見られた。

### 4. 中学校教員が感じる思春期健康支援のニーズと課題

中学校教員が感じるニーズと課題として 26 データから, 9 サブカテゴリー, 3 カテゴリーが生成された。

#### 【正しい性情報の獲得】

中学校教員は, 「性教育のところは, しっかりやってあげないといけない」と<正しい性教育の情報提供>や「情報が入ってきた時に, その情報をきちんと自分で正しい判断ができるような教育」といった<正しい情報を選択する力>を身につけ, 中学生自身が【正しい性情報の獲得】が出来るようにと考えていた。

#### 【幼少期から将来までを見据えた教育】

また, 中学校教員は性に関する教育のみならず, <思いを自己表現できる教育>や<将来を見据えた教育>, <親

元を離れる事を考えた教育>が必要であると考えていた。これらの必要な教育内容を「(段階的に)中1でこれくらい、中2でこれくらい、中3で(村から)出ていくからというようにできたらずごくいい」というように<段階的・継続的な教育>が必要と捉えていた。

#### 【人的ネットワークや支援体制の構築・強化】

しかし、中学校教員のみで行うことには限界を感じており、「必要な時に、ぱーっと来てくれるような存在がある」と…、(そのような)頼めるネットワークが大事」とく専門家とのつながりをもつ>ことが重要であると考えていた。また、「いろんな方と関わった方が、ここの子ども達にはこれからの事を考えるといいのかなって。限られた人間関係なので」という<地域や他者との交流の強化>や、<保護者との連携強化>という今後につながる課題を見出していた。

## VI. 考 察

### 1. 中学校教員が感じる中山間地域の中学生の現状

今回、明らかになった【異性に対する性意識の低さ】、【人間関係構築力の未熟さ】や【コミュニケーション力の未熟さ】という中山間地域の中学校教員がとらえた中学生の現状は、それを培う機会の少なさや少人数で長年過ごすという成育環境からきたものと推察される。

思春期は少しずつ親から自立し、親よりも友達と過ごす時間が多くなっていく時期である。人間関係における多くの成功体験と失敗体験は、対人関係接触の方法や人間関係を円滑に維持する工夫に関連する貴重な体験である<sup>3)</sup>と述べられているように、友達を含む多くの他者と時間を共有することは、これから人間関係を築いていく中学生にとって重要な経験である。また、思春期の中学生にとって、仲間集団に所属できるかどうかは大きな関心事であり、そのことが登校意欲や学校での適応にも大きな影響を及ぼし、さまざまな対人的なトラブルやいじめの原因になり得る<sup>4)</sup>ことが指摘されている。これらから、中学生にとって異性・友人関係構築が重要課題であり、その関係性が進学後の生活に大きな影響を与えることが考えられる。

しかし、中山間地域の中学生は、幼少時からお互いを十分知っている人間関係の中で育っていく。そのため、自分の思いや考えを口に出さなくても周囲は分かってくれるというあいまいなコミュニケーションが成立しやすい環境にあるといえよう。今回、明らかになった中学校教員の不安は、このような成育環境にある中学生が、大集団の中で円滑な人間関係を築くことができるのかという危惧から生じたものと考えられた。

また、思春期に異性への関心が高まることによって生じる性行動や性意識に関する不安は、一般の中学校教員も同様に抱く。しかし、中山間地域の中学校教員は、男女が平

気で同じ部屋に二人だけにいるという中学生の言動や、それに対して何も言わない親の性に対する認識に戸惑いを感じていた。このような成育環境による【異性に対する性意識の低さ】から、性的刺激を受けやすい進学先で性に関するトラブルに巻き込まれることを懸念した中山間地域の中学校教員における特徴的な不安の表出ではないかと考えられる。

### 2. 中学校教員が感じている思春期健康支援に対する思いと支援・ニーズ・課題

今後の思春期健康支援に必要な事として、【正しい性教育の獲得】、【幼少期から将来までを見据えた教育】が挙げられた。特に近年、スマートフォンの普及により、情報が獲得しやすい社会となった。そのような社会状況に加えて、進学後はより性が身近になる環境に身を置くことになる。このような現状から、中学校教員は離村する中学生への性教育の必要性を強く感じ、多くの情報から正しい情報を取捨選択する力をつけてほしいという中学校教員の願いの表れではないだろうか。

また、将来を見据えた教育の必要性が語られていた。思春期という多感な時期に親元を離れて生活していかなければならない環境下にある中学生だからこそ、狭義の意味での性教育ではなく、生活する力、生きる力を身につけてほしい、成長・発達の激しい時期に合わせた段階的な教育が必要との考えから表出されたものであろう。今後、より効果的な思春期健康支援のために、幼少時から子供達の健康支援の一端を担っている保健師との連携を図ることも必要だと考える。これにより専門的な視点で多角的に捉えられ、狭義から包括的な健康支援、継続的な支援体制構築につながることを期待できる。

今回の調査により、中学校教員は思春期健康支援に対して、【自己の実践力に対する不安】を感じながらも、【人的ネットワークの乏しさ】や【地理的条件から専門家への依頼を躊躇】している現状が明らかとなった。

前述したように、中学校教員は性教育の必要性は感じている。しかし中学校教員の多くは、性教育実施に対する戸惑いを抱いていた。中山間地域に赴任する教員数は少なく、その中で性教育の実践経験が豊富な教員は多くはないだろう。これらが中山間地域の思春期健康支援、特に性教育の取り組みへの困難感や戸惑いを引き起こしているのではないかと考えられる。

さらに、地理的条件も中学校教員の思春期健康支援の困難感を強めている要因の一つと考えられる。今回、調査を行った地域は、専門家(大学教員、助産師等)に依頼した場合、車で約2時間程度かかる。このような地理的特徴から、専門家の支援が必要な時も、「申し訳ない」と専門家への依頼を躊躇してしまい、必要な支援を受けることができないという戸惑いがあると考えられる。今後は、中山間

地域という地理的条件の厳しさや人的ネットワークの乏しさを解消できるように、教育機関や行政との連携強化を含めた支援体制作りが必要である。

## VII. 結 論

中学校教員が感じた中山間地域の中学生の現状には、異性に対する性意識の低さや人間関係構築力やコミュニケーション能力を培う機会の少なさがあった。また健康支援において性教育への戸惑いや困難感などがあるにも関わらず、中山間地域であるがゆえに専門家の支援の得にくさを感じており、今後の課題と考えられた。

なお、本演題発表に関連して開示すべき利益相反関係にある企業等はない。

### 引用文献

- 1) 西頭知子, 佐々木くみ子, 佐々木綾子, 他: 過疎地中学校の性教育の現状分析から過疎地中学校セクシュアリティ教育構築への提言, 大阪医科大学看護学研究雑誌, 3, p.109-119, 2013.
- 2) 西頭知子, 佐々木くみ子, 佐々木綾子: 過疎地中学校教師のセクシュアリティに関する教育への取り組み, 大阪医科大学看護学研究雑誌, 3, p.18-28, 2013.
- 3) 菊池和典, 高橋哲夫, 田中英彦, 他: 親・教師・友人と子どもの関係 実践・問題行動教育大系 3, 開隆堂, p.5-46, 1991.
- 4) 本間友巳: 中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析, 教育心理学研究, 48 (1), p.32-41, 2000.